



Title	漢語動詞ボイス接辞の辞書記述への提案：なぜ「実現スル」は自他両用なのに「實現하다」は他動詞用法しかないのか
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語・日本文化研究. 2024, 34, p. 25-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漢語動詞ボイス接辞の辞書記述への提案：

なぜ「実現スル」は自他両用なのに「實現하다」は他動詞用法しかないのか

金谷 由美子

1. はじめに

本稿の目的は、漢語動名詞「実現」のように、「スル」をつけて漢語サ変動詞として使用する語群の辞書の記載に、接辞「サセル」「サレル」の場合にどのようなボイスが表現されるのかについての記述を加筆することを提案することにある。具体的には①「サセル」を付けたときに他動詞になり得るものを表記すること、②「サレル」で受身文になり得ないものを×表記することを提案する。

現状の国語辞典では、これら漢語動名詞について、名詞としての使用のほか、「スル」を伴って自動詞（例：「移住スル」）、他動詞（例：「建設スル」）、自他両用（例：「移転スル」）としての使用があるという記述があるだけである。小林（2000）では、漢語サ変動詞には和語のような自他を区別する接尾辞がないとされており、それが日本語学での一般的な認識であったが、本稿では永澤（2007）が「スル」「サセル」等を接辞と呼んでいることを参考にした金谷（2018）に引き続き、「スル」「サセル」「サレル」をボイス接辞と捉え、漢語動名詞にこれら接辞を付けた状態をもって、ひとまとまりの動詞として機能するものとする。

辞書におけるボイス接辞の記述記載を求める理由として、日本語教育の観点から理由を3つ挙げる。(一)漢語動詞の数が膨大で授業のみでは学習が困難であるため、辞書の記載が必要である。(二)漢語動詞のボイス接辞は、日本語学習者の誤用が目立つ文法項目として知られている。そして、(三)韓国語の辞書では、既に動詞としても使用される漢語動名詞に関して、接辞とそのボイス情報を記載しており、これが有効であると考えためである。

本稿では、第2節で辞書への記述追加を求める理由について詳述する。第3節で、上述した辞書の記述との関わる、金谷（2018）で漢語サ変動詞の語幹である漢語動名詞を「無交替型」「交替型」に分けた理由を説明する。第4節では、日本語母語話者と非母語話者の学部大学生及び交換留学生を対象に実施した接辞の使用実態調査をもとに、金谷（2018）の有効性を検証し、漢語動詞のボイス接辞選択の誤用や不自然な選択が交替型に集中していることを漢語サ変動詞の辞書記述に接辞のボイス情報を加えるべき根拠として紹介する。第5節で、今後の課題について述べる。読後に辞書へのボイス接辞の記述記載に関して賛同していただければ幸いである。

2. ボイス接辞の記述を増やす理由

2.1. 数が膨大で外来語では新語も続々登場

漢語動名詞にスルをつけた漢語サ変動詞（以下漢語動詞と呼ぶ）の数は膨大である。いったいいくら存在するのかははっきりしたことはわからない。小林（2004）は、7年間（1985年～1991年）の朝日新聞の社説に登場する漢語動名詞を基礎データとしているが、その内訳をみると、異なり語数で二字漢語動詞が最も多く1440語、続いて三字漢語動詞が134語、四字漢語動詞が123語、その他が53語、計1750語である。本稿でも最も語数が多い二字漢語のサ変動詞を扱う。

また、サ変動詞とは、漢語に限られたものではなく、「ジャンプする」「ボイルする」「ダウンロードする」等の外来語系、「(繁華街を)ぶらぶらする」等のオノマトペ系と幅広い。オノマトペ系については、実際には動詞と言えるものが含まれるにもかかわらず、管見の限り辞書の見出しには形容動詞や副詞としか出ていない。「～スル」が外来語や新語を動詞化する接辞としても有効であることから、今後もサ変動詞は数を増やし続けるだろう。

学習者を対象に考えた場合でも、留学や検定試験のために、相当な数のサ変動詞を学ぶことになる。例えば、日本留学試験（EJU）読解問題コーパス（林2023）によると、2010年から2019年までの9年間、全19回でEJU読解問題中に出現したサ変動詞は1500件以上あり、「チェンジする」等の外来語系と一問にしか出ていない単語を抜き、ある程度対象を絞ったとしても、500語程の漢語サ変動詞が読解問題内に登場している。

張志剛（2014）では、旧日本語能力試験語彙リストにおける出現状況をまとめているが、そこでは二字漢語動詞4315語のうち、75%の3211語が上級の1級、2級で出題されており、日本語の難易度が上がるにつれ、漢語動詞の重要性が増すことがわかる。

2.2. 学習者の誤用研究から

これらすべてのサ変動詞のボイスについて母語話者のような知識を持ち使いこなすことは容易ではないことが想像できる。中でも、特に韓国語母語話者や中国語母語話者等、漢字圏の学習者は母語の漢語の知識があるため、母語のボイス体系の影響が漢語動詞の誤用に現れることが観察されてきた。

- (1) *戦後日本はとても発展された。(⇒した) (田窪1987)
- (2) *新政権が誕生して、通貨を安定した。(⇒安定させた) (石原2013)

(1)は「〇〇スル」で自動詞になる漢語動名詞に「サレル」を使用するという韓国語母語話者に典型的に見られる誤用であり、(2)のように、自動詞専用として使用されている「〇〇スル」を他動詞として使用することは、中国語母語話者に典型的である。

中国語では接辞による形態的な自他使い分けはないが、韓国語では、日本語と同様に漢語動名詞に(3)のような接辞をつけてボイスを表す。

(3) 韓国語動名詞の主たるボイス接辞 ※アルファベット表記韓国文化観光部 2000 年式

하다 hada : 概ねスルに該当し、自動詞、他動詞のほか、形容詞接辞にもなる。

시키다 sikida : 概ねサセルに該当し、他動詞接辞になる。

文脈により、有情物に何かをさせる意味での使役接辞にもなる。

되다 doeda : 意味的にはナルに近く、自動詞や受身の接辞として使用される。

漢語動名詞の動詞としての使用においても、この上なく日本語と似ている韓国語ではあるが、日本語との微妙なズレが度々研究者によって注目されてきた(生越 1982、2001、2008、柴 1986、田窪 1987、辛 1993、鷺尾 1998、許 2004、庵・高・李・森 2012、崔 2013、尹 2015、高 2017、その他多数)。また、庵(2008、2010)では中国語母語話者の誤用分析も行っており、中韓の母語話者両方の誤用研究の結果から、庵(2013)では、「中国語母語話者と韓国語母語話者では誤用の理由が異なるらしい」と推察している。

金谷(2018)では、その庵(2013)の問いに対する自分なりの解答を述べた。本稿では、さらに、実際に非母語話者がどのような接辞選択に困難を見せるのか、日本語母語話者とどのように異なる選択傾向があるのかを、中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者の大学生を対象に実施したアンケート結果をもとに、金谷(2018)の主張を検討した。これにより、本稿の提案である辞書におけるボイス接辞の記述方法の有効性を示す。

2.3. 韓国語辞書の記述を参考に

(4) は『Prime 韓日辞典』、(5) は『小学館朝鮮語辞典』の「停止」の記述の一部である。
[하]は、韓国語の漢語動詞のデフォルト接辞である하다(hada)の省略であり、横に「自・他」とあるのは、「停止 hada」で自動詞としても他動詞としても使えるという意味である。

韓国語では、【停止 hada】は自他両用、【停止 hada】【停止 sikida】の両方が他動詞として使用される。また、韓国語では【停止 doeda】で、自動詞、または受動態として使用可能である。※便宜上、韓国語の接辞は基本形で表す。

(4) 정지 【停止】 名詞 정지신호 (停止信号) 정지선 (停止線)

정지 【停止 hada】 [하] [自・他]

- 붉은 신호등이 커지면 停止하라(hada). (赤信号になったら停止せよ)
- 지불을 停止한다 (hada). (支払いを停止する)
- 차를 停止시키다 (sikida). (車を止める)

『Prime 韓日辞典』より

(4) a.は「停止 hada」で自動詞、(4) b.は「停止 hada」で他動詞、(4) c.は「停止 sikida」で他動詞としての使用例である。『小学館朝鮮語辞典』では、(4) 同様、【停止 hada】が自

他両用であることに加え、【停止 doeda】の場合の情報も記載している。

- (5) 정지되다 【停止 doeda】 自 受動 停止する、停止される
(例) 물의 공급이 停止되었다 (doeda) . (水の供給が停止された)
『小学館朝鮮語辞典』より

更に、『延世韓国語辞典』は見出し語として、【停止 hada】【停止 doeda】【停止 sikida】の三つを設けている。このような記述は、なんらかの形で、日本語の辞書でも可能であり、教育的な観点からも、辞書のページのスペースを取るに値する有効性があると考えられる。仮に日本語の【停止】に関して、(4)(5)のような記載をするとすればこうなるだろう。

- (6) 【停止】 名詞 一旦停止 停止信号
【停止する】 自・他 車が停止する。業務を停止する。
【停止させる】 他 車を停止させる。
【停止される】 受動 水の供給が停止される。

現在、日本語の国語辞典では「停止スル」で自他両用であるという記載がすべてであるが、「停止サセル」で他動詞として使用することが可能であり、他動詞が「スル」「サセル」の二種類の形式を持つという情報を示すことは有益である。また、「停止スル」が他動詞としても使用可能であるため、「停止サレル」で受身文にすることもできる。

但し、「～サレル」に関しては、自動詞として使用している文脈では「停止サレル」が使用できないため、辞書の「サレル」の表記に関しては、使用が不自然となる単語に限り「×サレル」とすることを提案する。間接受身文もある日本語では、「サレル」の記述が煩雑になる。また、韓国語の【停止 doeda】が自動詞として使用できるため、辞書への記載が必須であるのとは事情が異なる。次の(7)の「発展サレル」「安定サレル」のように、「～サレル」で受身文にできないときにだけ、×をつけて表示するにとどめた方がいいだろう。

例えば、誤用例で見た(1)の【発展】、(2)の【安定】は(7)で見るように、「発展スル」「安定スル」で自動詞専用、「発展サセル」「安定サセル」で他動詞、「発展サレル」「安定サレル」は不可である(※いずれも、尊敬の「サレル」は除く)。

- (7) 【発展】 名詞 経済の発展
【発展する】 自 経済が発展する。
【発展させる】 他 議論を発展させる。
×発展される

【安定】	名詞	物価の安定
【安定する】	自	物価が安定する。
【安定させる】	他	物価を安定させる。
×安定される		

自動詞専用といっても、すべて同じ振る舞いをするわけではない。(7)の【発展】【安定】とは異なり、【帰国】の場合は「帰国スル」で自動詞、「帰国サセル」は使役文になり、「帰国サレル」は間接受身文となる。このタイプの動作主が自ら何かをする、考えるタイプの自動詞は、物が主格として変化するタイプの(7)のような自動詞とは異なる。

- (8)【帰国】 名詞 帰国を待ちわびる
 【帰国する】自 娘が留学を終えて帰国した。

他動詞専用語幹の【禁止】の場合は、「禁止スル」で他動詞、「禁止サセル」で使役文、「禁止サレル」は受身文になる。【禁止】の場合、「禁止サセル」を他動化接辞として使うことはない。

- (9)【禁止】 名詞 外出禁止
 【禁止する】他 外出を禁止する。

(6)(7)のように、「サセル」で他動詞になる場合と(7)の「サレル」で受身文にすることができない場合を明記することによって、特に誤用の多い(7)のタイプの漢語動詞語幹に注意を促すことができる。

金谷(2018)では、誤用の多い自動詞専用である(7)【発展】【安定】と自他両用の(6)【停止】のタイプをボイス接辞によって自他交替が可能な「交替型」の漢語動詞語幹とし、自動詞としてしか使用しない(8)【帰国】と、他動詞としてしか使用しない(9)【禁止】を自他の交替がない「無交替型」の漢語動詞語幹と呼び、区別することを主張した。これらの区別を辞書の記述ですることは根拠があり、日本語教育上も有益であることを次節以降で説明する。

3. 交替型と無交替型に分ける試み(金谷 2018)

3.1. 漢語動詞も和語の有対・無対動詞に平行している

金谷(2018)では、漢語サ変動詞にも統語的・意味的な特徴から、和語で言う「有対・無対」(早津 1987,1989)にあたるものと主張した。和語動詞では、「止まる／止める」「減る／減らす」など形態で自他を区別しているが、早津(1987,1989)以降、このような

形態的、意味的に自他のペアのある動詞は「有対動詞」、他動詞「殺す」、自動詞「泣く」のようにペアの無いものは「無対動詞」と呼ばれている。

金谷（2018）では、表1のように漢語動名詞も接辞を変えることによって自他両用の動詞語幹になることができる有対動詞に近いものを自他交替タイプと呼び（以下、交替型と呼ぶ）（例：発展、停止）、接辞を変えることによって、スルで能動態、サセルで使役、サレルでは受動態になるもの（例：帰国、禁止）を無対動詞にあたる無交替タイプとした。このように、交替型と無交替型では同じ接辞をつけてもはたらきが異なるのである。

表1 交替型と無交替型とボイス接辞の意味

漢語動詞の接辞⇒	ースル	ーサセル
交替タイプ (和語の有対動詞)	自動詞	他動詞
無交替タイプ (和語の無対動詞)	能動	使役

次に、用例をひとつずつ入れた表2を見られたい。右端は現在の国語辞典のボイス表記である。辞書は前述したように、「スル」が後続する場合のボイスだけを扱っている。

表2 日本語の漢語サ変動詞の接辞ごとの統語的意味

	接辞 ➡	スル		サセル		サレル		スル 辞書の 記述
型	意味	他動詞	自動詞	使役／許可	他動詞	直接受身	間接受身	
無交替	移住		息子は海外に移住した	祖母は息子を海外に移住させた			(私は)突然息子に海外に移住された	自動詞
自他交替	発展		経済が発展した		工業化が経済を発展させた			
	停止	工員が機械を停止した		工場長が工員に機械を停止させた		機械が(工員によって)停止された	工場長は工員に機械を停止された	自他両用
			機械が停止した		工員が機械を停止させた			
無交替	殺害	AがBを殺害した		CがAにBを殺害させた		BがAに殺害された	DはAにBを殺害された	他動詞

無交替型（移住、殺害）と交替型（発展、停止）では、「スル」「サセル」が接続した場合の意味が異なるのは、表 1 で示した通りである。無交替型の場合は、「サセル」では使役、「サレル」では、他動詞専用語幹（殺害）が直接受身文、間接受身文の両方、自動詞専用語幹（移住）でも間接受身文が可能である。それに対して、交替型は自他両用（停止スル）も自動詞専用（発展スル）の両方が「サセル」でどちらも他動詞になるほか、自他両用（停止）の他動詞としての用法（機械が行員によって停止される）の場合以外は、自動詞による間接受身文（例：機械に停止された、経済に発展された）は容認しがたい。

日本語の受身文は直接受身文以外にも、身内や持ち物に何かをされる場合、専ら迷惑を表す間接受身文等、種類が多いことで知られているが、そのため辞書に「ラレル」に関する詳細な記載を追加すると、記述が煩雑になる可能性がある。第 2.3 節で示したように、「サレル」をつけて受身文にできないばあいだけにだけ×で示すという記述が適切だろう。

3.2. 交替型・無交替型の区別は通言語的である

同じ語幹で自他の交替が起きるかどうかは、ある程度意味的に決まっている点で、和語の有対／無対動詞の違い（早津 1987、1989）¹にも通じる。また、この現象は通言語的であることがわかっている。Haspelmath（1993）でも、自他交替がある語群は、非情物の変化や動きを表し、かつ、変化主体に多少なりとも自律性がある場合が想定されている（例：break, melt, roll, burn, open）。それに対し、無交替の語群は、有情物が動作主で（自動詞例：talk, dance, sleep）、他動詞の目的語側にはその事象に関して自律性がない事象を表す（他動詞例：help, invite, criticize, build）。

表 3 英語と日本語（和語）の動詞の自他（寺村 1982）※網掛は筆者による

	日本語		英語	
	自	他	自	他
絶対自動詞	死ぬ 泣く 歩く 走る 飛ぶ 這う		die cry ...	
相対自動詞 相対他動詞	壊れる あく 閉まる 回る	壊す あける 閉める 回す	rise lie	raise lay
絶対他動詞		殺す 切る 食べる 飲む 売る 買う		kill cut push
自他両用	ひらく 閉じる		break open close turn move change...	

表3は寺村（1982）による英語と日本語（和語）の動詞の自他についてまとめた表である。寺村（1982）では、有対動詞（交替型）は相対動詞、無対動詞（無交替型）は、絶対動詞と呼ばれている。網掛下部分は、本稿の交替型に当たる部分であり、英語では自他同形が多いのに対して、日本語では自他同形は少ない（例：開く、閉じる）。

英語や中国語では交替がある動詞群は自他同形であることが多く、韓国語や日本語では典型的には語幹に接辞をつけて動詞の自他に形態上区別をつけている点で大きな違いがある。交替型に当たる語群が中国語では同形で自他両用であることが、中国語由来である漢語動名詞を日本語、韓国語に動詞として借用する際に、大きな意味を持った。そして、日韓で漢語由来の動詞の受容の方式が平行的であったこと、さらに、類似部分とズレが生じた部分があることが日韓ではお互いの言語を学習する際に問題になることを金谷（2018）では論じた。具体的には日本語の漢語系動詞に韓国語では存在する自動化接辞（doeda）に該当する漢語動詞接辞が存在しなかったことが、日本語と韓国語のボイス接辞のズレの原因である。ラレルが受動接辞として文法化が進んだ日本語では、漢語を自動詞として使用するための自動化接辞が存在せず、「～スル」で自動詞という選択肢しかない。そのため、漢語サ変動詞のボイスが、他動詞側と自動詞側で非対称的となった。対して、韓国語では固有語と同様に対称的である。そのことについて、次節で永澤（2007）を紹介し詳説する。

3.3. 永澤（2007）というユリイカ・モーメント

本稿タイトルにある「実現（實現）hada」のように、日本語では「実現スル」のように自他両用の漢語動詞のうち、韓国語では接辞「hada」をつけて他動詞専用になっているものが多いことが、高恩淑（2017）でも指摘されている。どんな日韓対照研究や日本語教育の論文も解けなかったこの謎を、この永澤（2007）が解いてくれた。それと同時に中国語母語話者の（2）のような誤用の謎も解けたのである。本節ではこれについて詳述する。

金谷（2018）では、永澤（2007）の通時的研究にヒントを得て、現代日本語の漢語動詞に自動化接辞がなかったことが日韓の漢語動詞におけるボイス接辞のズレの原因であることを指摘した。韓国語母語話者の（1）*戦後日本はとても発展された。のような誤用は、長年日韓対照研究（生越 1982, 田窪 1987, 他）で論じられてきたが、多くはこの問題に対して、自動化と受動化を兼ねた接辞「doeda」の直訳「サレル」を用いることによる母語の負の転移であるという説明であった。韓国語では受動文と自動詞の区分が日本語のように分かれてはおらず、日本語の「ラレル」と「doeda」の意味領域が異なるためだという説明自体は間違っていない。では、なぜそのようなボイスのズレが、和語動詞では見られないスケールで漢語動詞において起きるのかについての納得のいく説明はなかったのである。

永澤（2007）は、近代（1868年～1945年頃）に多く日本語で使用されるようになった漢語動詞の自他体系が現代（1945年以降）までにどう変化したかを明らかにした通時的研究である。表4を見られたい。

表 4 近代から現代にいたる漢語動詞の自他体系の変化（永澤 2007）※網掛は筆者による

近代			現代	該当例				
Ⅰ 自動詞専用動詞	⇒	a	自動詞専用	安心する	移住する	感激する	感心する	居住する
				結婚する	行動する	死亡する	進歩する	努力する
				歩行する	労働する			
		b	自他両用	該当なし				
		c	他動詞専用	該当なし				
Ⅱ 自他両用動詞	⇒	d	自動詞専用	運動する	影響する	関係する	乾燥する	感動する
				減少する	残存する	集合する	出現する	消滅する
				進化する	増加する	動揺する	爆発する	発現する
				発達する	発展する	破裂する	沸騰する	分裂する
				変化する				
		e	自他両用	一転する	一変する	移転する	解散する	開始する
				回転する	拡大する	緩和する	決定する	合同する
				混合する	実現する	縮小する	上下する	停止する
				展開する	破壊する	発生する	復活する	分解する
				閉鎖する	冷却する			
		f	他動詞専用	隔離する	短縮する	変更する		
Ⅲ 他動詞専用動詞	⇒	g	自動詞専用	該当なし				
		h	自他両用	該当なし				
		i	他動詞専用	案内する	維持する	移植する	印刷する	開催する
				解説する	吸収する	建設する	作成する	殺害する
				準備する	製造する	設置する	設立する	断定する
				廃止する	排除する	配置する	発明する	販売する
				保持する	用意する			

※Ⅱの網掛部分が本稿の交替型に該当し、ⅠとⅢが無交替型に該当する。

表 4 は、近代から現在まで日常的に使われている二字漢語語幹 130 語を選び、『太陽コーパス』内の全用例を抽出し、用例数が 30 以上の 80 語についてその変化をまとめたものである（永澤 2007）。自他の判別基準はヲ格で目的語を取る動詞を他動詞とするが、「歩く」等移動動詞のヲ格は除外している。調査の結果、近代でも「スル」をつけて自動詞専用だった漢語動詞（表 4 のⅠ）と他動詞専用だったもの（表 4 のⅢ）は、現代に到るまで、それぞれ自動詞専用、他動詞専用のままで変化がなかった。それに対して、近代で「スル」で自他両用であった漢語動詞（表 4 のⅡ）のうち、多くが自動詞専用化したことがわかった（表 4 の d：濃い網掛部分）。一方、他動詞専用化は、意味が特殊化して有情物が主格になる用例に限られるようになったもの（表 4 の f：隔離スル、短縮スル、変更スルⁱⁱ⁾）以外

には見られず、残りの多くが自他両用のまま使用されている。

永澤(2007)でも、Haspelmath(1993)でも、動詞の意味、すなわち、動詞の表すイベントの自律性の有無と外部からの影響が交替型と無交替型に分かれる理由として説明されている。無交替型(表4のⅢ)の他動詞専用(例:「印刷」「発明」「排除」「廃止」)の動名詞語幹が表す事象は、人間や有情物の影響の介入がなければ成立しないので、初めから他動詞専用であり、また現代に到るまで他動詞専用である。また、無交替型(表4のⅠ)の自動詞専用(例「安心」「結婚」「行動」「労働」)は人間が動作主体であるため、初めから主格による能動的なイベントであり、無交替型の自動詞なのである。

(10) から(12)は、永澤(2007)の用例である。漢語動詞のうち、現代日本語でも(10)「解散スル」は自他両用として使用できるのに対し、現在では自動詞としてしか使用されない(11) b.「変化スル」、(12) b.「減少スル」ⁱⁱⁱが他動詞として使用されている。また、(12) a.「変更スル」は現在では使用されない自動詞としての用法だが、このような交替型から他動詞化したものは珍しい例である(表4のf)。

(10) 委員会が解散した／委員会を解散した。(近代・現代)

(11) a.人間の時代に寄って變化するが如く眞理も時代に寄って變化す。(1909)

b.人間が自然を支配し、其周囲の事情を變化することは、益々多きを加ふ。
(1901)

(12) a.國家思想の發達するに伴ふて、國旗の觀念も發達し、又其思想の變遷に従ふて、國旗の意義も變更し來る。(1901)

b.而して同志社は外人の干涉より離れて其の組織を變更し、而して同志社派の基督教徒は列國宣教師の同情を減少するに至れり。(1901)

永澤(2007)によれば、このような自他両用の「漢語動名詞+スル」の多くが自動詞専用化した変化の根底には、漢語動詞の和語化がある。中国語や中国古典である漢文の中で使用されていた状態から「スル」という接辞をつけて日本語として使用されるようになった後、次第に「本来は形態的な自他の区別がない漢語動詞においても区別する方向へ力がはたらいた結果」と永澤(2007)は捉えた。そして、この自動詞専用化(表4のd)を可能にしたのが、他動化接辞として機能する「サセル」の存在である。つまり、「発展スル」は自動詞専用化しても「発展サセル」を使えば、同じ漢語動名詞語幹を他動詞として使用できるため、自動詞専用化することができた。それに対して、表4のeの語群で他動詞専用化が起きなかったのは、日本語の漢語動名詞のボイス接辞に自動化接辞がなかったため、もし、この語群が「スル」で他動詞化すると、同じ語幹を自動詞として使用できなくなるためであると主張した。

この永澤(2007)の主張が正しいことは、韓国語では「doeda」という自動化接辞があり、

次に見るように、表 4 の e の語群では半数ほどが「hada」で他動詞専用化を起こしていることからわかる（金谷 2018）。なぜ日本語では自他両用の「実現スル」が韓国語「實現hada」では他動詞専用化しているかの謎が解明されたというわけだ（3.4 節で詳述する）。また、韓国語にも「サセル」に近い他動化接辞「sikida」が存在するため、日本語と同じ理由で、表 4 の d の語群では日本語と同様に自動詞専用化が起きたのである。このような漢語動詞のデフォルト接辞である「hada」による韓国漢語動詞の自他の分化は、和語と同じく接辞の形態で自他分化する固有語の動詞の体系を持つ韓国語で、日本語と平行的であったと考えられる。

そこで、金谷（2018）では、永澤（2007）の表 4 の 80 語に関して、現代韓国語ではどのような接辞で自他の使い分けがあるかを辞書の記述を中心に調査した^{iv}。その結果、表 4 の d の語群に関しては日本語のスルの場合と同様に「hada」で自動詞専用化しており（但し、韓国語の場合「doeda」で自動詞としても使用される）、日本語の「スル」で自他両用の表 4 の e の語群については、韓国語では「hada」で他動詞専用化に傾いていることが明らかになった。但し、韓国語母語話者の容認度は必ずしもこの通りではない。

（13）韓国語 （金谷 2018）※便宜上、漢字は日本漢字を使用する ※（ ）内は低頻度
①表 4 の d の語群（日本語では「スル」で自動詞専用）のボイス

- i. 「hada」で自動詞専用化したもの「hada/doeda」で自動詞
「進化」「破裂」「変化」「出現」「爆発」「感動」
「集合」「動揺」「発展」「分裂」「発達」（沸騰）
- ii. 「hada」自他両用だが、「hada/doeda」自動詞としての用法が優勢のもの
「消滅」「減少」「増加」「乾燥」（発現）
- iii. 名詞用法が優勢のもの
「残存」「影響」「関係」
- iv. 意味が狭まり、「hada」で無交替型の自動詞になったと思われるもの
「運動」

※日本語でも「運動する」は主として人が主格の無交替型になっている。

② 表 4 の e の語群（日本語では「スル」で自他両用）のボイス

- i. 「hada」で他動詞専用化したもの
「hada」他動詞 「doeda」自動詞（または受動）となる
「実現」「縮小」「緩和」「拡大」「決定」「破壊」「開始」「閉鎖」「移転」
- ii. 「hada」自他両用・「doeda」「hada」の両方で自動詞となり得る
「停止」「展開」「混合」「冷却」「分解」
- iii. 「hada」自他両用だが、「hada/doeda」で自動詞としての用法が優勢のもの
「回転」「復活」「一変」「解散」

iv. 「hada/ doeda」自動詞としての用法が優勢のもの

「発生」 ※日本語でも「発生する」はほぼ自動詞専用化している。

v. 「名詞」用法が優勢のもの

「一転」「合同」「上下」

なお、近代で自他両用(表4のⅡ)の漢語動詞語幹うち、意味が狭まり無交替型他動詞となったfの「隔離する」「短縮する」「変更する」に関しては韓国語の「隔離 hada」「短縮 hada」「変更 hada」でも同様に無交替型他動詞である。

(13) ②iv.の「発生」は、韓国語でも「hada」で自動詞専用化していると見てよい。日本語も辞書では自他両用になってはいるものの、現在の日本語ではほぼ自動詞専用化しており、現代(1945年以降)ではなく、ごく近年だけの調査であれば、恐らく表4ではdの自動詞専用化した語群に入れるべき語幹である。このように、「する」「hada」自動詞専用化している漢語動詞の語幹も日韓で共通していることは注目に値する。

ここで生じる疑問として、表4のⅡは、一体何を基準に、韓国語では自動詞専用化と他動詞専用化の二手に、日本語では自動詞専用化と(自動詞接辞がないため)自他両用の二手にわかれたかという問題がある。表4のⅡの自他交替型は変化主体の自律性と外部からの力のせめぎ合いがあるイベントを表すと言ってよい。例えば、自動詞専用化した表4のdの「破裂」「爆発」「乾燥」「増加」は人間や有情物の影響の介入がない場合が寧ろ多い事象である。一方、自他両用の表4のeの「冷却」「分解」「拡大」「復活」等は自然発生的に起きる場合だけでなく、人間が意図的に起こす場合が比較的多い事象である。

交替型(表4のⅡ)では、日韓ともにデフォルトの「スル」や「hada」で自動詞専用化したもの(表4のd)に関しては共通し、日本語では「スル」で自他両用の(表4のe)の語群は、韓国語では「hada」で他動詞専用化したものが多いという違いがある。この違いは、意味的な捉え方の違いというよりも、韓国語には「doeda」という自動化接辞が存在しているのに対して、日本語にはなかったことにより生じた違いであると考えられる。

また、韓国語では交替型の漢語語幹全体(表4のⅡ)で、「doeda」で自動詞、「sikida」で他動詞として使用されるものが多い。(13)で「hada/ doeda」で自動詞としての用法が優勢のものは、「sikida」を接辞として使用する方が自然だという母語話者の回答が多かった。

「hada」で自動詞専用である表4のdの語群は、日本語で「サセル」で他動化するのと同じく、「sikida」を接辞として使用しなければ他動詞として使用できないが、それだけでなく、「hada」で他動詞になる表4のeの漢語語幹においても「sikida」が好まれる場合が多いことは注目に値する。日本語でも「スル」で十分他動詞である文脈で、サセルの「余剰」がみられることが、定延(1991)で指摘されているが、韓国語でも同じことが起きているのである。ある程度自律的な事象である場合に、「サセル」や「sikida」が他動詞の「スル」や「hada」よりも他動化接辞として好まれている可能性がある。

3.4. 永澤（2007）から日中韓の対照研究へ

図1は、表4を図式化したものに、金谷（2018）での調査結果から、現代韓国語の漢語ボイスの変化を推測したものを右端に書き加えたものである。韓国語の通時的変化については未調査であるため、韓国語において近代から現代にかけて、日本語のような変化があったのか、それとも早い段階から自他の振り分けがあったのかについては断定できない。それでも、現在の用法を見ると共時的に見て図1右端のような自他の分離が韓国語の交替型の漢語動詞に見られることは確かである。無交替型では、韓国語も「hada」で自動詞、「hada」で他動詞であり、これまでの和語の誤用分析でも言われているように、無交替型は日本語、中国語、韓国語でもほとんどボイスにズレがなく、従って、誤用も少ない^v。

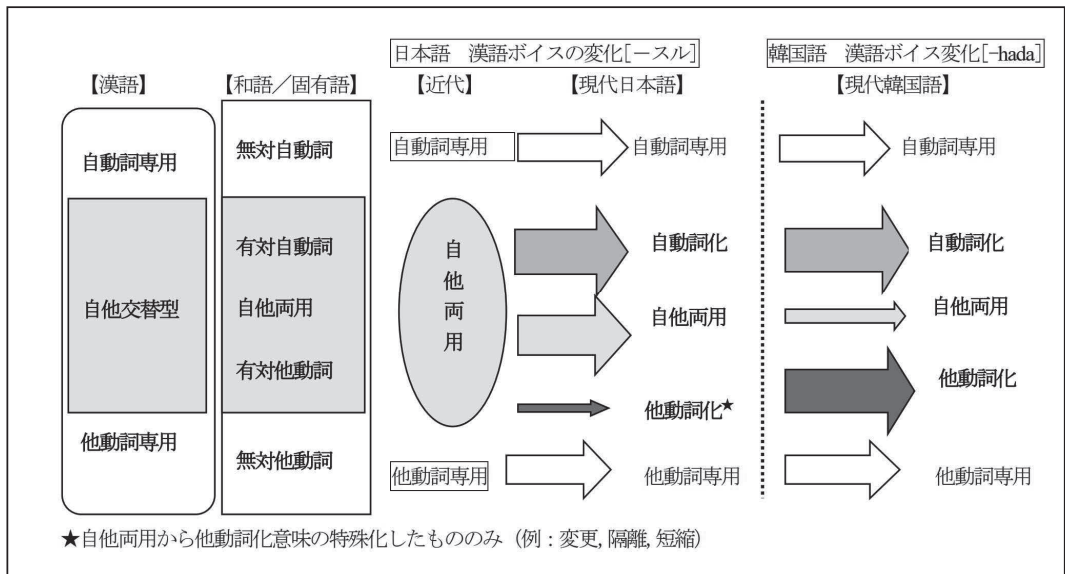


図1 永澤（2007）表4を図式化 韓国語の分化を書き加えたもの

また、前節で説明したように、金谷（2018）の韓国語母語話者への聞き取り調査では、自他交替型全体で、「doeda」で自動詞、「sikida」で他動詞として使用されるのが一般的であるということがわかった。日本語でも自他両用の表4のeの語群は「スル」でも「サセル」でも他動詞にはなるが、自動詞に傾きつつあるものは「サセル」で他動詞化するというのが一般的である（例：発生サセル、回転サセル、一変サセル）。

永澤（2007）は、韓国語や中国語と日本語の対照研究ではない。しかしながら、過去のどんな対照研究よりも（1）（2）の誤用を説明してくれる論文である。そして、なぜ「実現スル」は自他両用なのに「実現 hada」は他動詞用法しかないのかに見事に答えてくれた。

ここで、「実現」という動名詞語幹についてここでシミュレーションをしてみよう。

(14) 「実現スル」でのシミュレーション

日本語で「実現スル」がもし自動詞専用化した場合⇒問題なし

自動詞としての使用 ○「長年の夢が実現した」

他動詞としての使用 ○「私は、長年の夢を実現させた」(サセルで他動詞)

日本語で「実現スル」がもし他動詞専用化した場合⇒自動詞として使用不可

自動詞としての使用 ×「長年の夢が実現した／された」

他動詞としての使用 ○「私は、長年の夢を実現した」

これに対して韓国語では、こうなる。(便宜上、動詞部分以外は日本語で表記)

(15) 韓国語の「實現 hada」でのシミュレーション

韓国語で「實現 hada」がもし自動詞専用化した場合⇒問題なし

自動詞としての使用 ○「長年の夢が實現 hada」

他動詞としての使用 ○「私は、長年の夢を實現 sikida」(sikidaで他動詞)

韓国語で「實現 hada」が他動詞専用化した場合⇒問題なし(現実にならなっている)

自動詞としての使用 ○「長年の夢が實現 doeda」

他動詞としての使用 ○「私は、長年の夢を實現 hada」

韓国語では、このように自動化接辞と他動化接辞の両方があるため、図1に見られるように、自他交替型の語幹のうち、自動詞化するものと他動詞化するものが双方向に分化したと考えられる。それを可能にしたのが、「サセル」と似た「sikida (시키다)」と、日本語にはない自動化接辞「doeda (되다)」である。「doeda (되다)」は本動詞では「なる」の意味に近く、漢語接辞として自動化接辞の役割を担った。

日本語では、漢語動詞における自動化接辞の欠落があったため、「実現する」のような漢語動詞群を他動詞にしたいとできない状況があったのである。もし仮に「ナル」が漢語動名詞の自動化接辞として採用されていれば、漢語動詞の自他の分化が韓国語のように双方向に対称的になった可能性がある。興味深いことに、山形市方言では、漢語語幹に直接「ナル」を接続させるという現象がみられ、「ナル」が自動化接辞として機能していることを須賀(2015)が報告している^{vi}。須賀(2015)が挙げている「漢語+なる」の36例は、そのほとんどが韓国語の「漢語動名詞語幹+doeda」に翻訳可能である。自他交替型のうち、日韓で自動詞化が進む語幹「減少」も、韓国語では他動詞化が進む「実現」も「減少／実現ナル」で自動詞となり、もともと他動詞用法しかない「設置」「採用」は、「ナル」が接続すると受身文として解釈される点でも韓国語の「doeda」と同じである^{vii}。

残念ながら明治期に「ナル」が漢語動詞の自動化接辞として共通語に採用されることはなかった。そして、日本語と韓国語の漢語動詞のボイス接辞の体系は、韓国語の交替型の漢語動詞がシンメトリーに自他に分化したのに対して、日本語の交替型の漢語動詞は自動詞専用化だけを起こし、アシンメトリーに分化するという道をたどることになったのである。そして、これが、「実現スル」は自他両用なのに、「實現 hada」は他動詞専用というズレを生むことになった原因であり、相互の言語学習にも影響を及ぼすことになった。

4. 日本語漢語動詞のボイス接辞使用調査

4.1. 調査対象

2023 年度後期と 2024 年度前期に大阪大学外国語学部と同志社大学グローバルコミュニケーション（以下 GC）学部の日本語母語話者と非母語話者、奈良教育大学の留学生を対象に Googleform を用いて、漢語動詞のボイスに関する用例調査を行った。なお、研究使用に承諾を得られたデータだけを対象にしてる。

調査協力者 内訳

2023 年度 大阪大学外国語学部・同志社大学 GC 学部・奈良教育大学

日本語母語話者 100 名 （Googleform の先着 100 名）

非母語話者 55 名 （中国語母語話者 37 名・韓国語母語話者 18 名）

2024 年度 大阪大学外国語学部・同志社大学 GC 学部・奈良教育大学

日本語母語話者 50 名

非母語話者 50 名 （中国語母語話者 31 名・韓国語母語 19 名）

2023 年と 2024 年では日本語母語話者が 2 名、中国語母語話者が 11 名重複しているが、2024 年に関しては、新設の質問に関連する項目だけを示した。

4.2. 調査内容

動詞としての使用が一般的な漢語動名詞 10 種（安心、移住、集合、建設、禁止、移転、安定、実現、拡大、分離）について主格や目的格の助詞は確定した状態で用例を挙げて、スル、サレル、サセルのどの接辞のうち最も適切だと思うものを選択肢の中からクリックする設問を 17 問と、2024 年度には「分離」について文脈を変えて 2 問追加、計 19 問提出した。加えて、20 問から 22 問は、小森・三井(2016)に掲載されている動詞のボイスを選択させる類似問題のうち、助詞と動詞を同時に選択させる問題 3 問（観察、変化、減少）を、2023 年、2024 年の両方に出題した。

表5 アンケート用例（網掛は交替型：濃い部分は「～スル」で自動詞専用化）

	交替型／ 無交替型	語幹	例文	選択肢		
1	無交替型	安心	（わたしは） 彼のまじめに働く姿を見て、安心	しました	されました	させました
2	無交替型	移住	20世紀初頭、ブラジルに多くの日本人が移住	しました	されました	させました
3	無交替型	移住	20世紀初頭、日本政府はブラジルに多くの日本人を移住	しました	されました	させました
4	現在では 無交替型	集合	僕たち、駅前の公園にいったん集合（ ）ことにしました。	する	される	させる
5	無交替型	建設	新大阪駅近くに新キャンパスが建設（ ）予定です	する	される	させる
6	無交替型	建設	新大阪駅近くに新キャンパスを建設（ ）予定です	する	される	させる
7	無交替型	禁止	お客様、すみません。このエリアでは飲酒を禁止	しています	されています	させています
8	無交替型	禁止	お客様、すみません。このエリアでは飲酒が禁止	しています	されています	させています
9	交替型	移転	外国語学部が船場に移転	するのはいつですか	されるのはいつですか	させるのはいつですか
10	交替型	移転	外国語学部を船場に移転（ ）計画はいつ決まったのですか	する	される	させる
11	交替型	安定	この工法で地盤を改良すれば、液状化を防ぎ地盤を安定（ ）ことができます	する	される	させる
12	交替型	安定	この工法で地盤を改良すれば、液状化を防ぎ地盤が安定	します	されます	させます
13	交替型	実現	私は、長年の夢を努力の末やっと実現	しました	されました	させました
14	交替型	実現	私の長年の夢が努力の末やっと実現	しました	されました	させました
15	交替型	拡大	この10年で、日本では、経済格差が拡大	した	された	させた
16	交替型	分離	この工程では、この機械を使って牛乳から脂肪分を分離	します	されます	させます
17	交替型	分離	この機械を使うと、牛乳から脂肪分が簡単に分離	します	されます	させます
	2024年度		追加した問題			
18	交替型	分離	生クリームは温度が高いところにおいておくと、水分と乳脂肪分が分離	します	されます	させます
19	交替型	分離	生クリームが泡立っている途中に分離	した	された	させた
			助詞と動詞を選択する問題			
20	無交替型	観察	最新のデータによると、北極のある地域では、永久凍土が崩れ落ちていること	を観察している	が観察されている	
21	交替型	変化	近年、若者の職業に対する価値観	が変化してきている	が変化されてきている	を変化させてきている
22	交替型	減少	ここ数年、気軽に救急車を利用する人が増えているため、重症の患者が救急車を利用できないということが起きている。そこで、A市は、救急車を有料化することによって、救急車の利用数	を減少した	が減少した	を減少させた

4.3. 調査結果と考察

4.3.1. 無交替型 (①～⑧) と交替型 (⑨～⑰) の差

図2は無交替型の動詞語幹に関する設問 (①～⑧) についての日本語母語話者 100 名の回答 (左) と非母語話者 55 名 (右) の回答を並べてみたものである (数字は人数)。図3は、交替型の動詞語幹に関する設問 (⑨～⑰) について同様に両者を並べたものである。

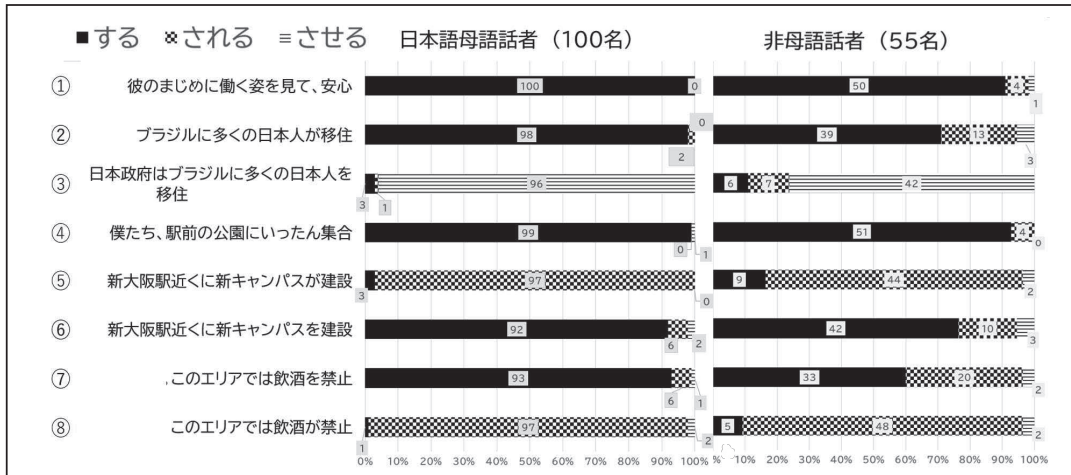


図2 無交替型 日本語母語話者 (左) と非母語話者の比較 (右) 2023 年調査

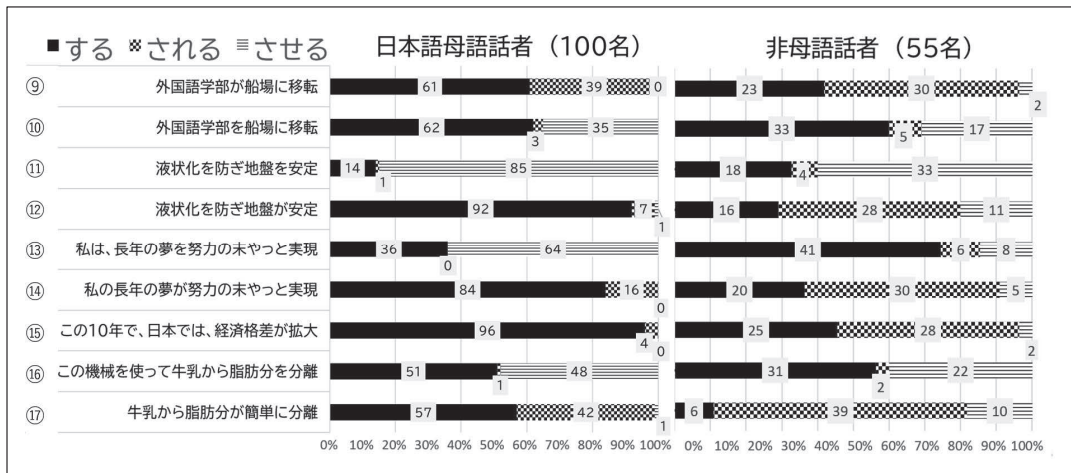


図3 交替型 日本語母語話者 (左) と非母語話者の比較 (右) 2023 年調査

無交替型 (図2) では日本語母語話者の回答はすべての設問に関して 95%前後が同じ回答をしており、非母語話者も②「日本人が移住されています」や⑦「飲酒を禁止されています」が多かったのを除けば、総じて母語話者と同じものを選んでいいる。一方、交替型 (図3) では、非母語話者の選択は誤用も含め日本語母語話者の選択とはかなりの違う結果とな

った。これは、和語の先行研究でも、有対動詞（本稿の漢語動詞では交替型に当たる）に誤用が多く、教育上も難しいと言われていることに通じる（守屋 2008、中石 2020、他）。

4.3.2. 交替型（⑨～⑰）で母語話者と非母語話者の結果が異なるもの⑫⑬⑭⑮⑰

交替型での比較（図 3）では、まず、母語話者の選択が分かれる設問とそうでないものがあることがわかる。そして、非母語話者の選択肢も無交替型の場合（図 2）に比べて総じて選択肢が分かれていることがわかる。特に、母語話者が 8～9 割程度同じ選択をしている⑫「地盤が安定します」⑭「夢が実現しました」⑮「経済格差が拡大した」において、非母語話者の中に母語話者が選択したものとは異なるものを選択している割合が目立つ結果となった。

交替型の設問で使用した漢語動詞のうち、「安定スル」で自動詞専用化している⑪⑫「安定」を除き、⑨⑩「移転」⑬⑭「実現」⑮「拡大」⑯⑰「分離」はすべて日本語では「スル」で自他両用であるが、韓国語では辞書の表記も含め、「移轉」「實現」「擴大」「分離」は、いずれも接辞が「hada」で他動詞専用に傾いている。そして、中国語では、これらの動詞は基本的に自他同形である^{viii}。

繰り返しになるが、日本語では、交替型の語幹を他動詞として使用する場合の接辞として使用可能な接辞は「スル」「サセル」、自動詞は「スル」のみが接辞として可能である。それに対して、韓国語では自他両側にシンメトリーに接辞が存在するため、交替型の動名詞語幹の場合、「hada」「sikida」が他動詞の接辞、「hada」「doeda」が自動詞の接辞として使用されている。その結果、これらの語群では、日本語が「スル」で自動詞として使用する場合に、韓国語母語話者が「doeda」→「サレル」と直訳的に変換してしまうという誤用、または、偏りが見られる。一方、中国語母語話者は日本語の「スル」で自動詞専用化した漢語動詞を他動詞として使用する誤用が多いほか、自他両用の「漢語+スル」においては、他動化接辞「サセル」を使用せずに「スル」で他動詞として使用するという他動化接辞「サセル」の非用が目立った。

「安定」は、もともと交替型の語幹ではあるが、「安定スル」でほぼ自動詞専用化しているものである。そのため文脈とは関係なく、「サセル」（⑪「地盤を安定させます」）で他動詞、「スル」で自動詞となる（⑫「地盤が安定します」）。これが、母語話者の選択肢がほぼひとつに集約されている理由である。これに対して、非母語話者では「安定」に関する誤用が無交替の自動詞①「安心」②③「移住」④「集合」に比べ目立つ結果となった。非母語話者は、⑫で半数が「地盤が安定される」を選んだのである。中でも韓国語母語話者のうち 6 割に当たる 11 名が「安定サレル」を選んでおり、「安定サレル」が半数以下の中国語母語話者がよりも割合が高い。ここでも、(1)と同様、韓国語母語話者は、「doeda」→「サレル」と直訳した可能性が高い。「doeda」は「サレル」とは異なり、変化主体が外部の影響とは無関係に何かに「ナル」ことを表すことができる自動化接辞となることがで

きる。また、「doeda」には可能の意味も含まれる可能性があるため、⑫の文脈に可能の意味合いがあることも影響しているかもしれない^{ix}。

一方、今回調査した「安定」以外の他の交替型の語幹は、動詞語幹は日本語では「スル」で自他両用になるため、変化物が主格か目的格かという格表示だけではボイスが決まらず、文脈次第で選択肢の偏りが変化する。⑮「拡大」を見ると、日本語母語話者では、96%が「経済格差が拡大した」を選んでいる。これは、「経済格差」が広げようとして広がったというよりも、なんらかの原因はあるにせよ、自律的に広がったものであり、「経済格差の拡大」が人為的な操作に限界がある事象であることによると思われる。そのため、日本語母語話者の場合、「経済格差が拡大された」はやや不自然だと感じるのではないだろうか。

日本語のラレル（サレル）は基本的に外部からの人為的な影響が加わったことを示す働きがある。Jacobsen（1991）では、(16)「拡大」の例を挙げて、「拡大した」と「拡大された」の違いは、外部の動作主の存在であると説明した。

(16) Jacobsen (1991)

- a. 戦争が拡大した。（自発的）
- b. 戦争が拡大された。（意志動詞の受身文）

非母語話者では、特に韓国語母語話者で「拡大サレタ」が8割近く（77.8%）と目立つ。これは、韓国語では、「擴大 hada」で他動詞専用化しており、自動詞として使用する場合は「擴大 doeda」を使用するため、「doeda」を「サレル」に直訳する結果だと推測される。中国語母語話者では「拡大サレタ」は4割に満たず、「拡大シタ」の自動詞使用が半数以上を占めることから、「拡大」が自他同形の中国語母語話者では、「拡大スル」の自動詞用法も韓国語母語話者に比べ、比較的使用しやすいものであることがわかる。

では、⑮「拡大」の結果と比べ、⑨⑩の「移転」における日本語母語話者と非母語話者の選択結果が似通っているのはなぜだろうか。「移転スル」は他動詞用法と自動詞用法の両方がある点では「拡大スル」と同じである。しかしながら、⑮の「拡大」とは異なり、⑨「外国語学部が{移転スル/移転サレル}」は両方とも日本語として違和感がない。大学の学部を移転するのは人間や組織であり、人為的な行為であることから、「移転」の用例では、「移転サレル」の受身文も容認度が高いのではないだろうか。これがこの設問において、日本語母語話者の4割が「外国語学部が移転サレル」を選択した理由であろう。結果として、「移転 hada」を他動詞として使用する韓国語母語話者が「移転 doeda」を「移転サレル」と直訳的に使用しても日本語とズレがさほど生じないということになる。

4.3.3. 「実現スル」は自他両用なのに「實現 hada」は他動詞用法というズレ⑬⑭

3.4節で詳述した「実現」に関する結果を見てみよう。⑬「私は、長年の夢を努力の末や

っと実現 {しました／されました／させました}」に関しては、誤用の「夢を実現サレル」は1割程度で、比較的問題がなかった。しかしながら、日本語母語話者は「実現スル」か「実現サセル」の選択肢では6割以上が「サセル」を選択しているのに対して、非母語話者は明らかに「スル」が多く、中国語母語話者、韓国語母語話者共に7割以上が「実現サセル」ではなく「実現スル」を選んでいる。これは、「実現」が中国語では自他同形であること、そして、韓国語では「實現 hada」で他動詞専用であることから起きた(hada→スルの直訳)による「スル」の多さと見ることができる。

これに対して、⑭の「私の長年の夢が努力の末やっと実現 {しました／されました／させました}」では、誤用「サセル」以外にも、若干不自然な「実現サレル」の選択が半数以上と目立った。また、ここでも、「夢が実現サレル」を選択したのは、韓国語母語話者が7割、中国語母語話者は5割以下と両方で明らかに異なる結果となった。韓国語では「實現 hada」で他動詞、「實現 doeda」で自動詞となっているため、ここでも「doeda→サレル」の直訳が起きていると考えられる。それに対して、中国語「实现」は同形で自他両用であり、日本語でも「実現する」をそのまま自他両用で使用している傾向があると見てよい。

(17) 中国語の「实现」『小学館中日辞典』より※自他表記は筆者による

自 他的理想实现了 (彼の理想が実現した。)

他 为实现这个愿望而努力 (この願いを実現するために努力する)

日本語母語話者では「夢が実現サレル」を選択したのは16%に過ぎない。なお、この用例⑭では、私の夢が私の長年の努力によって実現が達成されたことから、「実現された」という受身接辞を使用すると、「私」が動作主体の受身文は日本語では不自然であるという制約にひっかかり、ほとんどの母語話者は「実現された」を選ばなかったと思われる。

4.3.4. 文脈によって選択肢が変わる例 「分離」⑯⑰⑱⑲

「分離スル」は、日本語では自他両用、韓国語では「分離 hada」で他動詞専用化している。中国語では自他同形である。中国語母語話者も、韓国語母語話者も他動詞として使用する場合は日本語母語話者と似通った選択結果が出た。日韓共にデフォルトの「スル」「hada」でも他動化接辞「サセル」「sikida」でも他動詞として使用するため、⑯「この工程では、この機械を使って牛乳から脂肪分を分離 {します／されます／させます}」では全体を見ても誤用がほとんどなかった(母語話者1名、中国語母語話者2名がサレルを使用)。それに対して⑰「この機械を使うと、牛乳から脂肪分が簡単に分離 {します／されます／させます}」では、非母語話者と日本語母語話者とは異なる様相を見せる。非母語話者の2割程が誤用である「脂肪分が分離させます」を選んだほか、日本語母語話者では拮抗している「脂肪分が分離 {します／されます}」(57:42)の選択において、中韓の母語話者ではどちら

も7割前後が「サレル」を選択している。

機械が行うにしても人為的な動作であるため「脂肪分が分離されます」が不自然というわけではない。ただ、2018年度以降、毎年授業でこの⑰の「この機械を使うと牛乳から脂肪分が簡単に分離{します／されます}」が母語話者でも拮抗する結果に多少の驚きがあった^x。というのも、⑨「外国語学部が{移転スル／移転サレル}計画」の「移転」に比べ、脂肪分の「分離」は非人為的に発生する可能性の高い事象だと筆者には思われたからである。そこで、少し文脈を変えて、自然に脂肪分が分離するような文脈にすれば、母語話者の選択肢が変化するのではないかと考え、非母語話者の選択肢がこのような文脈に影響を受けるのかを見るために2024年度の調査では、⑱⑲の設問を追加した。

次の図4は、それぞれ⑰⑱⑲の設問における2024年度の日本語母語話者50名（左）、非母語話者50名（右）の選択結果である。

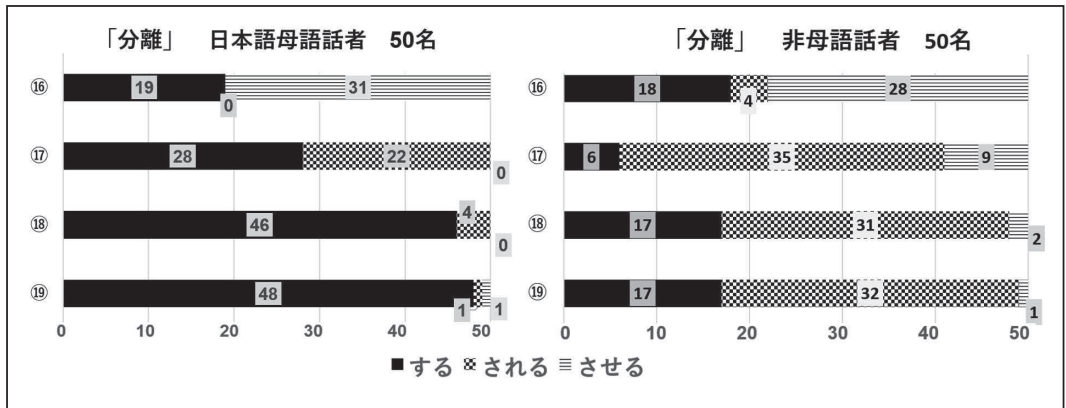


図4 「分離」用例アンケート結果（2024年度日本語母語話者・非母語話者各50名）

(18) 「分離」設問用例（2024年度調査）

- ⑰ この工程では、この機械を使って牛乳から脂肪分を分離
{します／されます／させます}。
- ⑱ この機械を使うと、牛乳から脂肪分が簡単に分離
{します／されます／させます}。
- ⑲ 生クリームは温度が高いところにおいておくと、水分と乳脂肪分が分離
{します／されます／させます}。
- ⑳ 生クリームが泡立っている途中に分離
{した／された／させた}。

2024年度の日本語母語話者50名も、2023年度と同様に、⑱では、「スル」56%（日本語母語話者50名中28名）、「サレル」44%（日本語母語話者50名中22名）と拮抗していたが、⑲では92%（日本語母語話者50名中46名）が、「水分と乳脂肪分が分離します」と

「分離スル」を自動詞として選択し、⑩では、さらに96% (50名中48名) が、「生クリームが分離します」を自動詞として選択した。「分離スル」は自他両用であるため、「〇〇が分離サレル」も文法上は可能であるが、日本語母語話者は、9割以上と、無交替型の漢語動詞の接辞選択と同じぐらい明らかに選択の偏りを見せる結果になった。もっとも、この調査方法では「分離スル」を好んだというだけで、「分離サレル」に違和感があるかどうかまではわからない。しかしながら、ここで言えることは、日本語母語話者は文脈によって選択肢を変えている可能性が高いということである。そして、その基準は、おそらく変化主体のイベントにおける自律性だと考えられる。

⑪の機械を使って脂肪分を分離する場合とは異なり、⑫は生クリームを放置する以外は人為的ではないため、直接的に人間が「分離」に関与していない。また、⑬は生クリームを泡立てるという人為的な行為による結果であるにもかかわらず、⑫以上に自動詞を選ぶのは、生クリームが分離するという結果が、常識的に考えて「意図せぬ失敗」であること、また、泡立てる動作主が「わたし」であると推測できる文であることから、⑭「夢が実現スル」の用例と同じ理由で、動作主が一人称の受身文が使用しにくいと考えることができる。⑫⑬は、いずれも、非人為的（あるいは非意図的）な要素と変化主体自体の独立した自律的な事象であるという文脈が自動詞の使用を促したと見ることができるだろう。

この母語話者が見せた文脈による選択肢の変化に対し、非母語話者は⑪と⑫⑬のいずれも、6割以上が「分離サレル」を選び、文脈にはほとんど左右されていないことがわかった。⑪に比べると、⑫⑬では、「分離スル（自動詞）」の選択者が3倍近くに増加しているものの、文脈によってほぼ全員の選択肢が「分離スル（自動詞）」に偏ることになった日本語母語話者とはかなり差異のある結果である。

このことから、交替型で自他の選択が難しい理由の一つとして、文脈による使い分けもあることが明らかになった。従来から指摘されてきた和語動詞の有対動詞における自他選択が難しい理由と同じく、文脈によって使い分けることが難しいということがわかる。これは、辞書の接辞表記だけでは解決しない問題ではあるが、⑪で、母語話者には出てこない「～が分離サセル」が無視できない数で出てきていることは、「分離サセル」を他動詞として使用することを辞書に記述することの必要性の証左になるだろう。

なお、韓国語の場合は、「分離 hada」が他動詞専用であるため、「分離」という語幹を自動詞として使用する⑪⑫⑬では「分離 doeda」にしなければならない。この「doeda」の直訳として「サレル」が出て来たと考えられる。そのため、中国語母語話者で「分離サレル」が多い理由が韓国語母語話者の誤用と同じ理由ではないことは明確だ。中国語では「分離」のような交替型の動詞が同一の形態で自他両用であることから、「分離スル」を他動詞、「～が分離サレル」はその受身文という選択をしたという説明ができる。同じ「サレル」という形式が選択されている場合でも、中国語と韓国語では原因が異なるというわけである。

4.3.5. 助詞と一緒に選ばせる設問 ⑳㉑㉒

この三つは助詞も同時に選ぶ問題であるが、それでも3つとも日本語母語話者の選択肢は9割以上偏っていた。その理由は、3問とも動詞が㉑「観察スル」が他動詞専用、㉑㉒はともに、「変化スル」「減少スル」で自動詞専用化しているため、選択肢が絞られるためである。

(19) 助詞も同時に選ぶ問題 (小森・三井 2016) ★日本語母語話者選んだ選択肢

㉑最新のデータによると、北極のある地域では、永久凍土が崩れ落ちていること

{を観察している／★が観察されている}。

㉑ 近年、若者の職業に対する価値観

{★が変化してきている／を変化させてきている／が変化されてきている}。

㉒ ここ数年、気軽に救急車を利用する人が増えているため、重症の患者が救急車を利用できないということが起きている。そこで、A市は、救急車を有料化することによって、救急車の利用数 {を減少した／が減少した／★を減少させた}。

㉑は、母語話者は97%が「が観察されている」を選択、非母語話者も8割以上が、「が観察されている」を選んでいて、これは、調査結果の引用文である。このような場合は動作主である観察者は背景化されることが多いため、ヲ格の他動詞文よりもガ格の受身文が選択されたのだろう。「観察する」は観察される側は完全にコントロールできない外部からなされる動作動詞であり、無交替型の他動詞である。

それに対して、㉑と㉒は永澤 (2007) でも自動詞専用化が進んだことが認められている交替型の「変化する」と「減少する」である (表4のd)。この二つは、㉑に比べ、日本語母語話者と非母語話者の選択肢がかなり異なる。㉑では、日本語母語話者は98%が「が変化してきている」を選択、「変化する」を自動詞として使用したが、非母語話者はここでも「変化される」の使用が3割近くと交替型で自動詞専用化した漢語動詞には使用できない「サレル」を選択した。

㉒では、日本語としては誤用になる「救急車の利用数を減少した」が14%出ているが、交替型の「スル」で自動詞専用化した単語を他動詞として使用するという中国語母語話者に最も典型的な(2)の誤用と同じものである。また、韓国語母語話者は、「が減少した」よりも「を減少させた」を選び、比率は2:7である。中国語母語話者がスル:サセルで、3:2であったのと比べ、明らかに韓国語母語話者が「減少サセル」の他動詞用法を使いこなしていることがわかる。これは、交替型の「スル」で自動詞専用化した漢語動詞 (表4のd) は韓国語でも「hada」で自動詞専用化している語彙が多く、かつ、この「hada」で自動詞専用化した動詞語幹群を「サセル」に該当する「sikida」を用いて他動化する。この日本語の「サセル」に類似の他動化接辞「sikida」の存在が影響していると思われる。

4.4. 調査のまとめ

以上の結果から、日本語、中国語、韓国語の三言語の母語話者がお互いの言語を学習する際に、起こり得る問題を推定したものが表6である。韓国語母語話者の中国語学習や中国語母語話者の韓国語学習については、現時点では推測に過ぎないが、この問題の全体像を理解してもらう上でも重要であり、今後の課題となると考え、表6にまとめた。今後は、日本語話者の韓国語学習と中国語学習における漢語動詞の誤用や非用も含め、この3者の漢語動詞の使用における学習者の誤用／非用の傾向を分析することにより、金谷(2018)の検証と、辞書のボイス接辞の記載が実現できれば本望である。

表6 日中韓それぞれの母語話者が他の2言語を学習する際に起こりうる誤用や非用

母語↓	目標言語		
	中国語	韓国語	日本語
中国語母語話者		・韓国語で自動詞に傾いているもの(例:減少)を他動詞として使用する誤用。 ・韓国語で他動詞に傾いているもの(例:実現)を自動詞として使用する誤用。 ☆ 他動化接辞「-sikida」の非用。	日本語で「-する」で自動詞に傾いているものを他動詞としても使用する誤用。 (例:救急車の利用数を減少する) ☆ 他動化接辞「-させる」の非用。
韓国語母語話者	・韓国語で自動詞に傾いているもの(例:減少)は、中国語の他動詞として使いにくい(非用)。 ・韓国語で他動詞に傾いているもの(例:実現)は、中国語の自動詞として使いにくい(非用)。		・「交替型」のうち、「-する」で自動詞として使用する場合は「-される」とする傾向と誤用。(例:「*発展される」) ・韓国語で「-hada」で他動詞に傾いているもの(例:実現)を自動詞として使用する際に特にその傾向が強まる。「-する」で自動詞として使いにくい(非用)。(例:「計画が実現された。」(文脈によっては不自然となる)>「計画が実現した。」)
日本語母語話者	日本語で自動詞に傾いているもの(例:減少)は、中国語の他動詞として使いにくい(非用)。	・「交替型」のうち、韓国語では「-hada」より「-doeda」で自動詞用法が自然なもので「-hada」を使用する傾向や誤用。(例:「*結核e(に)感染hada。」) ・韓国語で「-hada」で他動詞に傾いているものを自動詞として使用する誤用。 (例:「*計画i(が)実現hada。」)	

中国語母語話者の場合は、日本語の使用において、交替型のうち、自動詞専用に傾いているものを「スル」で他動詞として使用する誤用(㉔*救急車の利用数を減少スル)が目立つ。自他両用においては他動詞能動文の場合に、日本語母語話者が「スル」よりも「サセル」を好んで使用する場合でも「スル」を他動詞として使用することが観察される(㉙外国語学部を船場に{移転スル>移転サセル})。このことから、中国語母語話者は、韓国語学習においても他動詞接辞としての sikida の使用が韓国語母語話者に比べ低くなることが予測される。また、交替型の自動詞専用に傾いている韓国語の動名詞語幹を「hada」で他動詞として使用する(㉔*救急車の利用数を{減少スル/hada})という誤用が日本語同様に起こりうるだろう。交替型で他動詞に傾いている「漢語+hada」では、日本語母語話者と同

様に「hada」を付けて自動詞としても使用してしまうという誤用が生じることが推測される（例：*夢が実現 hada）。

次に、韓国語母語話者が中国語を学習する場合、交替型のうち、日本語母語話者と同様に、母語で自動詞に傾いているもの（例：「減少 hada」）の語幹「減少」を中国語の他動詞として使用することだけでなく、韓国語で他動詞に傾いているもの（例：実現 hada）の語幹「実現」を自動詞として使用することもおそらく非用傾向が現れるだろう。日本語学習においては、(1) *戦後日本はとても発展サレタ（再掲：田窪 1987）のように、日本語で自動詞専用で傾いている漢語動詞語幹に「サレル」を用いて不自然になる場合が多い。日本語で自他両用の場合は、受身文の意味に違和感のない文脈であれば「サレル」でも自然な場合もある（⑨外国語学部が船場に移転サレタ）が、そうでない場合は不自然な日本語になり得る（⑮？この 10 年で日本では経済格差が拡大サレタ）。

日本語母語話者の場合はどうだろうか。まず、日本語母語話者は日本語で自動詞に傾いているもの（例：減少スル）の語幹「減少」を中国語として使用する際に、自動詞としての使用に傾き、他動詞としての非用が見られるだろう。韓国語学習においては、交替型のうち、日本語で自動詞に傾いているもの（例：減少 hada）は、日本語と平行しているため、自動詞として使用でき、問題はあまり起きないが、それでも韓国語は「doeda」で自動化する場合があるため、「hada」で自動詞にできないもの（例：感染 doeda）が難しい。「hada」「doeda」の両方が自動詞として使用されている場合もその使い分けが難しい。これは、日本語で「夢を実現スル」「夢を実現サセル」の両方があり、その違いがあまり明瞭でないことに似ている。韓国語では、シンメトリーに自他のどちらにも二つのボイス接辞が存在しているが、日本語では、自動詞側には「スル」のみ、他動詞側にだけ韓国語と同様に、「スル」の他に「サセル」が存在している。本稿のタイトルにもある日本語では「スル」で自他両用の動名詞のうち、韓国語では他動詞に傾いているものを、日本語母語話者は自動詞として使用する誤用が生じやすい（例：*夢が実現 hada）。他動詞として使用する際には、日本語でも「実現スル／サセル」はどちらも他動詞としての使用が可能であるため、「実現 hada」「実現 sikida」を他動詞として使用する範囲においては誤用になりにくい。

5. 今後の課題

最後に、残された最大の課題はなんといっても、金谷（2018）でも本稿でも推測の域にとどまっている、近代から現代への韓国語における漢語動詞接辞のボイスの通時的変化を調査し確認することである。現代の用法は一部確認済みだが、本当に日本語と平行する変化があったかは永澤（2007）のように、近代韓国語と現代韓国語を比較する調査を行わなければならない。

金谷（2018）の調査の際にわかったことだが、現在の韓国語母語話者は、一昔前の辞書のボイス表記に違和感を持つケースがあった。例えば、『小学館朝鮮語辞典』（1993）『東亜

새국어辞典第四版』(2002)『延世韓国語辞書』(1998)『Prime 韓日辞典第1版』(1994)では「停止 hada」は自他両用として記述されており、ネットで検索できる辞書でもそれを踏襲しているが、数名の韓国語母語話者(30代~40代)に尋ねると、「기계가 정지하다 (機械が停止 hada)」は不自然に感じられるため、「停止」という漢語語幹を自動詞として使用するときは、「기계가 정지되다 (機械が停止 doeda)」と言う方がしっくりくると言う。韓国語では「停止 hada」が今回の調査で使用した「實現 hada」「擴大 hada」「移轉 hada」「分離 hada」と同様に他動詞専用に傾き変化しつつある可能性が見て取れる。また、交替型全体で自動詞は「doeda」、他動詞は「sikida」を好む場合が多くある。

日本語でも同様に交替型の自他両用タイプの漢語動詞において「サセル」で他動詞として使用するケースが増えている可能性がある。角田(2021)では、「サセル」文が和語動詞、漢語動詞の両方で増殖していることが指摘されている。角田(2021)は、次のような漢語の例もすべて「スル」を使用した方が他動詞として自然だと感じるようだ。

(20) 角田(2021) ?は角田による容認度の判定

- a. ?オーストラリアが輸入を拡大させたので… (NHK テレビニュース 2012年)
- b. ?…やる気を持続させる… (朝日新聞 DIGITAL2013年)
- c. ?国会が都構想を実現させて… (朝日新聞 2012年)

さらに、今回は、漢語動詞に限った調査だったが、このサ変動詞を交替型と無交替型に分ける試みは、第2節で言及した外来語やオノマトペ系のサ変動詞のボイスについても有効である。但し、英語等の外来語の場合は、当初から意味が狭まった状態で自動詞、または、他動詞として導入される場合が多く、漢語のような動名詞語幹の意味からの類推が効かない。例えば、「ボイルする」「ブレイクする」「フリーズする」は英語では、boil, break, freeze と、すべて自他同形だが、日本語ではどうだろうか。「ボイルする」は他動詞専用として調理方法に意味が狭まった状態で外来語として受容されている。対して、「ブレイクする」は、人気が出るの意味で自動詞、「フリーズする」は『明鏡』『新明解』にも自他両用で記載されているが、パソコン等の機械が動かなくなるの意味での自動詞使いが主たる用法である。現代日本語では、新しい外来語のサ変動詞が次々に生まれており、今後外来語系のサ変動詞のボイスも非母語話者が悩む外来語のカテゴリーとして辞書での記載に対する要望が増加する可能性があるだろう。漢語と同様に、接辞「スル」の場合の自他記載のみならず、サセル(他動詞)やサレル(受動文)の接辞使用の可否の記載を提案したい。

【参考文献】(あいうえお順)

庵功雄(2010)「中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察」『日本語・日本語教育学会研究』1: pp.103-118.

- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄・高恩淑・李承赫・森篤嗣（2012）「韓国語母語話者による日本語漢語サ変動詞の習得における母語転移に関する一考察」『JSLs 2012 Conference Handbook』
- 庵功雄・宮部真由美（2013）「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告：「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4：pp.97-108.
- 石原嘉人（2013）「漢字圏の学生に対する漢語スル動詞の導入」『琉球大学留学生センター紀要』10：pp.1-16.
- 生越直樹（1982）「日本語漢語動詞における能動と受動—朝鮮語 hata 動詞との対照」『日本語教育』48号：pp.53-65.
- 生越直樹（2001）「現代朝鮮語の하다動詞における하다形と되다形」『朝鮮文化研究』8：pp.94-75.
- 生越直樹（2008）「現代朝鮮語における様々な自動・受動表現」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一編著『ヴォイスの対照研究』くろしお出版
- 金谷由美子（2018）「漢語サ変動詞のボイスに関する一考察」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育研究』9：pp.135-150. ココ出版.
- 小林秀樹（2000）「漢語動名詞の自他」『日本語教育』107、pp.75-84.
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 高恩淑（2017）「日本語学習者に対する漢語サ変動詞の導入について：韓国語母語話者への誤用対策を中心に」『人文・自然研究』11：pp.115-129.
- 小森万里・三井久美子（2016）『レポート論文を書くための日本語文法』くろしお出版
- 定延利之（1991）「SASE と間接性」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』pp.123-147. くろしお出版
- 柴公也（1986）「漢語動名詞の態をいかに教えるか—韓国人学生に対して—」『日本語教育』59：pp.144-156.
- 渋谷勝己（2006）「第2章自発・可能」『シリーズ方言学2：方言の文法』岩波書店, pp.47-92.
- 須賀一好（2015）「形式動詞としての〈なる〉—山形市での漢語動詞の用例観察から」『金沢大学国語国文』40：pp.1-8.
- 辛碩基（1993）「日本語と韓国語の漢語動詞：受動の形態を中心として」『日本語と日本文学』18：pp.12-21.
- 田窪行則（1987）「誤用分析5」『日本語学』8月号：pp.133-138.
- 崔海倫（2013）「二語漢字動詞における日韓対照研究」『北海道大学研究論集』12：321-337.
- 張志剛（2014）「現代日本語の二字漢語動詞の自他」くろしお出版
- 角田太作（2021）『日本語の地殻変動：ラレル・テアル・サセルの文法変化』くろしお出版
- 寺村秀夫（1987）「第3章態：格の移動と述語の形態との相関」『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

都恩珍・黄情児(2007)「韓国語の「되다(doe-da)」被動文の意味的特徴に関する一考察—日本語の「漢語+する」形に対応する場合を中心に—」『桜花学園大学人文学部研究紀要』9、pp.99-115.

中石ゆうこ(2020)「日本語の対のある自動詞、他動詞の習得段階とそれに適した指導方法」
江田すみれ・堀恵子(編)『自動詞と他動詞の教え方を考える』くろしお出版

永澤済(2007)「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』第3巻4号: pp.17-31.

林希和子(2023)「日本留学試験読解コーパスの作成と分析—非漢字圏高等教育機関進学希望者への支援を目的として—」『専門日本語教育研究』第24号: pp.67-74.

早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6: pp.79-109.

早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95: pp.231-256.

許明子(2004)『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房

守屋三千代(2008)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に—」『講座日本語教育』第29分冊 pp.151-165, 早稲田大学日本語研究教育センター.

尹亨仁(2015)「日韓両言語における漢語動詞の「負の転移」をめぐって—2字漢語動詞を中心に—」『神奈川大学言語研究』37: pp.1-26.

鷲尾龍一(1998)「韓国語漢語動詞における動詞選択の問題—對應하다, 對應되다の場合—」『研究報告(2) 先端的语言理論の構築とその多角的な実証』2-A: pp.389-416.

Haspelmath, Martin (1993) “More on the typology of inchoative/causative verb alternations”. In Bernard Comrie and Maria Polinsky, (eds) *Causatives and Transitivity* (pp.87-120). John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/ Philadelphia.

Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*, Kuroshio Publishers.

【辞書類】

『明鏡国語辞典 第二版』(2012) 大修館書店 『デジタル大辞泉第二版』(2012) 小学館

『中日辞典 第二版』(2003) 小学館 『中日大辞典 増訂第二版』(1987) 大修館書店

『現代汉语大词典』(2007) 上海辞书出版社 『朝鮮語辞典』(1993) 小学館

『東亜外国語辞典第四版』(2002) 斗山東亜 『延世韓国語辞書』(1998) 斗山東亜

『Prime 韓日辞典第1版』(1994) 斗山東亜 『Prime 日韓辞典第3版』(2004) 斗山東亜

【註】

ⁱ 早津(1987)による動詞の意味分類

無対自動詞:

- (1) 動きや変化を伴わない静的な状態を表す(ある、そびえる、ざらつく、要る)
- (2) 人の動作・行為・表情・感情などを表す(歩く、さわる、ほほえむ、めいる)
- (3) 広い意味の自然現象を表す(晴れる、降る、死ぬ、病む、しぼむ、枯れる)

有対自動詞：

- (4) 物の物理的状態の変化・存在場所の変化・二者間の位置関係の変化などを表す
(曲がる、上がる、はずれる、詰まる、備わる)
- (5) (人の活動によって成立する) 事象そのものの変化をあらわす
(始まる、終わる、変わる、決まる、続く、起こる)
- ii つまり、(12) a. 「国旗の意義も變更し来る」における「變更する」≡「変わる」のような自動詞としての用法は消え、人間が何かを變更スルという意味でのみ使用されるようになったことが他動詞専用化の原因である。
- iii 永澤 (2007) では自動詞専用化した群 (表 4 の d) に入れられている (12) b. 「減少スル」は現在でも辞書では「スル」で自他両用との記述がある。但し、実際には他動詞用法は「減少サセル」が自然だと考える人が多く、『明鏡国語辞典』にもその旨の記述がある。
- iv 金谷 (2018) では、永澤 (2007) の 80 語が中国語と韓国語で使用されている場合に動詞としてどのようなボイスで使用されているのかについて辞書の表記に基づき、中国語と韓国語の母語話者による聞き取り調査を行った。
- v 詳細は金谷 (2018) を参照されたい。
- vi 須賀 (2015) の【注】には、永澤 (2007) の要旨を紹介したうえで、「この小稿は、漢語動詞の自他体系のありようについて、地域方言の面から考察を加えた。」とある。永澤 (2007) を受けて、この山形方言の自動詞化機能を持つ形式動詞「なる」について書いたとのこと。
- vii このような現象が山形市方言で見られるのは、山形市方言が和語動詞においても生産的な「自発」接辞を持ち (渋谷 2006)、ボイス体系の中に「自発」領域を維持しているからではないかと推測される。
- viii 但し、「移転」は使用されない。中国語の類似の意味を持つ単語「遷」「搬」等は自他同形として使用される。「安定」は形容詞としても使用する。
- ix 韓国語の漢語動詞接辞「doeda」は、その漢語動名詞が状態性動詞語幹である場合に現れることについては、都・黄 (2007) でも指摘されている通りである (例：孤立 doeda、麻痺 doeda、変質 doeda)。中国語では形容詞用法もある「安定」自体、動作的な動名詞語幹ではなく、意味的に状態性がある。日本語でも形容詞的に「安定した／安定している NP」と連体修飾で使用されるほか、「NP が安定している」という形容詞的なテイル述語文も作る。
- x ⑰での母語話者の回答に「この機械を使うと、牛乳から脂肪分が簡単に分離 {します／されます}」の選択において、2023 年度も 2024 年度も 4 割が「分離されます」を選んだことは筆者にとっては意外だった。角田 (2021) でも、⑰のような自動詞として漢語動詞の接辞「スル」が使用できる場面での「サレル」の使用が増加していることが指摘されている。自動詞用法とも言える方向への漢語動詞接辞「サレル」のボイス変化は否定しきれないが、⑱⑲の自律的な場面では「分離します」が両方 9 割を超えたことから、少なくとも現時点では、漢語動名詞の接辞としての「サレル」にも「ラレル」と同様に、外部からの有情物による多くは人為的な影響を含意するという性質があり、「サレル」が自動化接辞の機能を持っているとは言えないだろう。

本稿は第 44 回社会言語科学会研究大会 (2020 年 3 月) での発表「現代日本語のヴォイスの非対称性について：「-aru」と韓国語「jida (지다)」の対照を例に」の内容の一部に調査結果等を加え、観点を加筆したものです。

【謝辞】

林希和子氏に貴重な研究データを共有していただきました。ここに感謝の意を表します。大阪大学外国語学部の皆さん、同志社大学グローバルコミュニケーション (GC) 学部の皆さん、奈良教育大学の留学生の皆さん、ありがとうございました。